私とみっちゃん　金曜日。

煮っ転がし梓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私とみっちゃん　金曜日。

【Ｎコード】
Ｎ３６８８Ｖ

【作者名】
煮っ転がし梓

【あらすじ】
みっちゃんと私のお話。
私は幽霊になります

（前書き）

刃物、注射器など登場。
残酷描写あり。
流血注意。

死んだ。
死ぬ、ってどういうことなんだろう。私は死んでるのかなあ。あ、死んでるってわかるってことは死にきれてないってこと？
……わかんないけど、とりあえず。

ばいばいみっちゃん。

どうやら私は霊になったようだ。人の周りをぷらぷらする、浮遊系の。
こうして外を浮かんでるとなんだか面白い。みんなは地面から離れらんないのに、私だけ地面にバイバイしてる。なんか、お得な感じ、上がったり下がったりできるし。

そんなぷらぷらな私には誰も気づかないみたい。目の前をビューンて横切って「ぼく土左衛門！」とか挨拶しても、この女の人ガン無視。折角綺麗なのに勿体無い。好感度がっくん。
さて、実験も終わったし、なにしよっかな。
死んでるっちゃあ死んでるけど、気分は仮病でプール見学してる子の気分。やることないし、暇暇暇。
ツゥーとイケメンの前を通りすぎたとこで、私の通ってた学校の制服発見。ちなみに過去形なのはもう死んでるから。
―誰でしょうな。
偶然知り合いって、そんなわけないけど、見慣れた髪型だったから観察中。
腰までありそうな髪の毛をゆるく巻いて、サイドに流してる艶やかな黒髪。

間違いない。こいつは

「みーなみ！なにしてんの？」
―みっちゃんだ。
声をかけられたみっちゃんはびくりと肩をびくつかせて、素早く振り返った。ゆる巻きが春の風になびく。
声をかけた子は……私とは別クラスの、朱音さんだ。朱音と書いてあかねと読まず、普通に「しゅのん」と読ませてしまう御両親のセンスは良いのか悪いのか。
「あ……、朱音じゃん。何？」
「私今日部活なの。朝練に一番に行こうって思って、早起きしたんだぜ！」
えっへんと威張る朱音。いつも寝坊する朱音とは思えないから、自慢するのはわかるわかる。
「……あ、そっか。……頑張って。」

「うん！てか、みなみは帰宅部なのになんで制服け？」
「あ……」
「今日は土曜日だぜ？まさかボケてた？」
昨日は金曜日。ふらいでー。学校はあったのだ。つまり、そゆこと。
「ホントにドジっ子やなあ。っと、んじゃ私学校いくね！じゃねぇ～ん」
華麗なステップでどこかへ行ってしまった朱音。あっちゅーまに人混みの一部と化してしまうま。
「……やば」
―充分やばいね、みっちゃん。見られたもんね、制服姿。
「いつも邪魔なんだから」
―いつもべったり。
「むかつく」
―暴言だって受け入れてもらえなかったな。
「あんなやつ」
―そうやって君は
「死ねばいい」
―また友達を殺すのかな？

夢遊病ならぬ浮遊病にかかった私は学校にきた。靴箱で靴を脱ごうとしたけど、そういえば浮いてるんでした。てへへ。
土曜日だから、生徒の矯声は運動部のいるグラウンドに集中していて、校舎内はシーン。声を出したら響きますな、こりゃ。
テクテク（浮きながら）教室へ向かうと、第一男子生徒発見。なんだか挙動不審。きょんしーきょんしー。何かを探しているような、見つからないようにしているような。

声をかけてみたいけど、果たして私のゴーストボイスが彼の耳に届くのであろうか。実験してみよ。

「「「なにしてんの」」」
「ひ、ひぃっ……！？」

お風呂にいるように反響した私の声は、どうやら彼の耳には届いているようだ。なぜ反響しているのか？幽霊だから。
Q&Aにもならない。
「だっ、どこ……」
声の主を探しているようで、あたりをキョロキョロ。きょんしー度が増している。
―隣だよ。とーなり。
見事な右キックを彼の脇腹に決めたが、脇腹を通りすぎて彼のお腹あたりで止まってしまった。
なんというかむかつく。きーづけよっ！
「「「ふふふ、こっちこっち」」」
仕方ないので彼のまわりをくるくる回ってみる。きづくまで。
「「「あはははっあはっあはははっ」」」
「う、うわあぁあああ！！！」
くるくるまわるので、声もあちらこちらから聞こえてくるようで、彼はおっかなびっくりである。
なにせ幽霊ですから、人より倍動けるとですたい。
くわばらくわばら。
「わあぁ……、って、この声……ま、まさか、北条？北条、なのか……？」
―あ？
思わず笑うのをやめてしまう。彼には正解の合図となった。

「や、やっぱり北条かよ！ったくびっくりさせやがって！出てこいよ！」
反響はしているものの、声の主がわかった途端、出てこいよと調子に乗ってやがる。
ところで、私はこいつを知らないんですが。
「「「誰？」」」
「……北見だよ！覚えてねーのか？」
―き、たみ？
果てしなく覚えがありません。記憶力のいい私が覚えてないということは、こやつは相当影が薄かったんでありましょうな。やーいボンクラ。
「ったく、どこに居るんだァ？」
私がどこかに隠れていると睨んだのか、おもむろに掃除道具入れのドアに手をかける
……が、
「……と、ここはさっき見たっけか」
―どういうこと？
この発言をそのまんまとるとするなら、この中を覗いたということ。掃除をしていた様子はないし、わざわざ掃除道具入れの中を確認する意味がわからない。
そこに、パタパタと、いやバタバタと大きな足音が近づいてきた。
「ッ！！」
彼は辺りの机を倒しながら後ろへ退いたが、その足音の主は彼の願いも虚しく、この教室のドアを開けた。
「あぁら、やっぱりここにいたのね？北見くん」
ねっとりと、こちらの意識を絡めとるような不快と妖美の狭間の声で、美しい彼女は言う。
当たり前だが私には気づいていない。
「ッ……、蔵田」
「やだ、そんな怖い目で見ないで。泣きそうよ、私」

随分嬉しそうにこんな台詞を言うものである。こいつがぺてん師であることは間違いない。
「く、蔵田。お前」
びくつきながらも、蔵田という名の女子を呼ぶ北見。非常にへっぴり腰であるが、目だけはガンガン。正直怖い。
「くすくす……、なにかしら」
「っ……、お、俺は」
「俺はァァ…？」
空気が一瞬、止まる。
一度瞬きをして、瞼を押し上げた瞬間、
「―ぅぅおぉぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！」
「ッ！？……グぁッ」
北見は机を押し退け、蔵田へと急接近し、右手の平を固く握りしめ、彼女の鳩尾に突っ込んだ――いや、押し入れた。
突然のことに、うまく事態が飲み込めなかった蔵田は、一瞬の隙を突かれ、廊下へと横向きに倒れ込んだ。苦しそうな呻き声を一度あげ、しばらく起き上がることができなかったが、一瞬笑みを浮かべ、立ち上がろうとする蔵田。蔵田の反撃に備え、戦闘体勢に入った北見。
腰をあげた蔵田は、しっかりと北見を見据える。逃がさないように……、しっかりと狙えるように。
「―はっ、窮鼠猫を噛む……ね」
「……」

「いいわ……、相手してあげるぅぅう！！！」

言葉を吐きながら、北見へと走る蔵田は、しっかりとスカートのポケットに片手を突っ込んでいた。なにか武器がしまわれているのであろうポケットに、一瞬目がいった北見は、隙をつくってしまう。その隙を蔵田は見逃さない――――！！！

「――ッ！？！？！？！？」

「ふふっ」

「「「んなっ……！？」」」

思わず声を漏らしてしまうほどに、それは意外で、圧倒的だった。余裕綽々の笑みを浮かべる蔵田の手には、ポケットから取り出したナイフが握られていた。カッターナイフなんてものではなく、刃渡りが９ｃｍもある小型ナイフだ。それは折り畳み式でもなく、どうやってポケットにしまっていたのかと思えば、小さなハンカチに包んであったようだ。彼女の、ナイフを握っていない方の手は、ハンカチを握りしめている。

ナイフは、咄嗟に抵抗しようとした北見の右手を深々と切り裂き、鮮血を滴らせている。北見の右手の傷口は、血が溢れ、左手で押さえても、どうやら効果がないらしい。左手が真っ赤に染まっている。

「あああっっ！！……や、やりやがった……」

「んっふふふ……、あっははは、きゃはきゃはきゃは！！」

――――と、ここまでバトル風に実況はしてみたものの、なにこれ？少年漫画臭さ漂わせてますよ？

いい加減飽きてきちゃいます。

ま、そんなこんなで、ナイフ持ってきゃはきゃはしてる蔵田と、中二混じりなポーズ取ってる北見は、睨み合っちゃってるわけ。ヤン

デレって怖いね！

「いい加減にしろ蔵田……俺はっ……、何もしちゃ……」
「いない、ですってぇ？ふざけんじゃないわよ、あれの何処が何もしていない内に入るのよ」
「く……」

まったくもって状況が読めませんが、きっとこの教室にくる前に、磯巾着……間違えた、一悶着あったようです。いや、実況しなくてもわかるか。北見くんは余程のことをしたんでしょう。蔵田さんお怒りＭＡＸです。

「わかる……？私の気持ち。……ね、ェ……、！」
「き、……凶器を持ってたのはお前だけじゃないようだな、蔵田よぉ……」
「そ、それ――――」

蔵田さんマウント取られましたっ。
どうやら、要注意人物は蔵田さんだけではないようでして、まともそうに見えた北見くんも同様だったようです。なぜ武器を持ち歩くんですか。警察は何をしているんですか。
すっかり調子に乗った北見君は、ズボンのポケットから何かを取り出します。
影になっていてよく見えませんが、どうやらナイフに相等する武器です。あのドヤ顔。ぜひライブ中継で皆様に見ていただきたいものです。完璧にも程がある。口がひくひく、目がひくひく。
北見くんは、凶器を腰に当て、隠すように持っています。しかし、蔵田さんの位置ではばっちり見えるそうで、目がひきつってます。
よほどのものなんでしょうか？
私はいらない勇気を振り絞って、蔵田さんに近付きます。

こんにちは！

「どうだ・・・・・・、お前らの研究も、無駄じゃなかったな」
「っく・・・・・・、いつ奪い取ったというの！？あなたはっ・・・・・・、あなたは動けなかったはずよ！！あの子が縛ったんだもの！！ねぇ！！」

研究？
奪い取った？
縛った？
もしかして――――、あれは

「効果を試すためにてめぇに注射してやろうか？アッチではしねぇのか・・・・・・、研究員にはよぉ？
俺等にとっちゃ地獄だったんだぜ・・・・・・、なにより、ブッ太いからなぁ！？おい！！」

どうやら注射器です、この話の流れからすれば、ウイルス？病原体？のようなものが中に入っているようです。
蔵田さんがこれを研究していて、その部屋には北見さん達が拘束されていて、それを奪って逃げた――――、こう考えるのが妥当でしょう。
私は空気をとっても読める子なので、その場で解説！
尺とか全然気にしません、ぱっぱと終わらせて帰る名探偵のように。
いらない考察は省きます。

「北見くん・・・・・・、あなたはそれを使えば、後悔する！絶対にね！」
「なんでだよ、てめぇらが作ったんだろ？」
「ふふっ・・・・・・、万が一のことも考えるのが私たち・・・・・・

・。あなたたちの手に渡ったならば、早急に対処しなくちゃぁねぇ・・・・・・・」

「そういう割には、焦ってたじゃねぇかよ」

「・・・・・・・・・・・・・・、どうかしら・・・・・・・」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3688v/

私とみっちゃん　金曜日。

2011年10月9日12時23分発行